

設立 平成24年 5月15日  
開塾 平成24年 9月 8日  
発行 令和元年12月14日  
(85号)

# 中之島こゝろ

[事務局] 〒648-0094  
橋本市三石台4-1-15  
TEL 0736-38-3669  
FAX 0736-38-3680  
発行 學塾・中之島事務局

人間学講座  
第87講

「御代替わりの年を考える皇室と神宮」  
講師 内山 陽神宮学堂



伊勢神宮には天照坐皇大神

(天照大神)を祀る皇大神宮と、衣食住の守り神である豊受大神を祀る豊受大神宮の二つの正宮があり、皇大神宮は内宮、豊受大神宮は外宮と呼ばれる。まず外宮を参拝してから内宮に参拝するのが正しいとされている。広義には、別宮、摂社、末社、所管社を含めた、合計125の社宮を「神宮」と総称する。他の多くの神社は仏教建築の影響を受け、瓦屋根や朱塗りの建物に変わっていったが、伊勢神宮は神明造という古代の建築様式を受け継いでいる。これは弥生時代の高床式倉庫が起源で、神へのお供え物をする特別な建物だったと言われる。伊勢神宮は皇室の氏神である天照坐皇大神を祀るため、歴史的に皇室・朝廷の権威との結びつきが強い。祭主は今上天皇の妹(明仁第一皇女子)黒田清子さん

○即位の礼及び大嘗祭関係諸儀式等

即位の礼及び大嘗祭関係諸儀式等のうち、皇室の行事として行われるものは、次のように定められた。(五月一日官報号外特第一号掲載)

(正宮)

○皇大神宮の御鎮座

垂仁天皇(第十一代)即位二十六年丁巳秋九月甲子

皇大神宮の御祭神

天照坐皇大神

○天岩戸

爾に高天原皆暗く、葦原中国に悉に闇し。此れに因りて常夜往く。是に万の神の声は狭蠅なす満ち、万の妖悉に発りき。

○天孫降臨

天照大神 ← 瓊瓊杵尊

三種の神器(八咫鏡・八咫瓊勾玉・天叢雲劍)

○天壤無窮のみことり

豊葦原の千五百秋の瑞穂国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫、就きて治らせ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、当に天壤と窮り無かるべし。

○同床共殿のみことり

吾が児、この宝の鏡を視まさむこと、まさに吾を視るがごとくすべし。

○皇室の御系譜

天照大神 ← 天之忍穗耳尊 ← 瓊瓊杵尊 ←

彦火火出見尊 ← 鸕鷀草葺不合尊 ← 神倭磐余

彦尊(神武天皇)

神武天皇の御即位

辛酉年春正月、庚辰朔

○天照大神の奉遷(崇神天皇六年)

六年に、百姓流離へぬ。或いは、背叛くものあり。

其の勢、徳を以て治めむこと難し。

是を以て、晨に興き夕までに惕りて、神祇に請罪す。是より先に、天照大神・倭大国魂、二の神を、天皇の大殿の内に並祭る。

然して其の神の勢を畏りて、共に住みたまふに安からず。

○天照大神の御神託

是の神風の伊勢国は常世の浪の重浪帰する国なり。

傍国の可憐国なり。是の国に居らむと欲ふ。

○日本武尊と倭姫命

道を枉りて伊勢神宮を拝む。仍りて倭姫命に辞して曰はく、

「今天皇が命を被りて、東に征きて諸の叛く者どもを誅へむとす。

故、辞す」とのたまふ。是に、倭姫命、草薙劍を取りて、日本武尊に授けて

曰はく、「慎め。な怠りそ」とのたまふ。

○賢所の御創始

漸に神威を畏みたまひて殿を同にしたまふこと安からずおぼしたまふ。

故れ更に斎部氏をして、石凝姥神の裔と、天目一箇神の裔の二氏を率ゐて、

更に鏡を鑄、劍を造らしめたまひて、護神の御璽と為したまひき。

是は今 踐祚之日に献る所の神璽の鏡・劍なり。

○宮中三殿

賢所 皇靈殿 神殿

○大嘗祭

悠紀殿・主基殿

○神嘗祭

○日別朝夕大御饌祭

豊受大神宮(外宮)にて鎮座以来、毎日斎行

御饌殿

(講師レジュメより抜粋)

当初の講師は、井上象英氏でしたが、講師都合により代講を務めていただきました。



## 《感動語録》

講話 内山 陽氏

## 【Aグループ】

① 日本人として知っておくべき多くのことを学んだ。

② 天皇 毎朝夕の祈り、休まず続けておられる年間1500の祭事。

③ 2600年続いている国を誇りに思う。

## 【Bグループ】

① 国民一人ひとりがこの国とを祈る。

② 神話の時代から2600年、126代続いている今上天皇

③ 皇室が世界一歴史がある。

## 【Cグループ】

① 歴史の深さと、祈りの大切さが理解できた。

② 天皇に祈られていることを、伝えたい。

③ 三種の神器が理解できた。

## 【Dグループ】

① 天皇が毎朝夕祈られていることにあらためて感動。

② 一番長い歴史を持っており、自信と誇りを持って子どもたちに伝えたい。

③ 先祖から受け継がれていたことを知ることが大切。



## 《感動講話》

中山 緑様



私は子どもの頃からどうして人は生まれ死んでいくのか、と考えていました。主人(中山靖雄先生)とともに修行するなかで、人の本体は御霊であることを学びました。頭で考えたり、心で思うのは、人がより良く生きるために備わっているためで、本来にその人の本体となっているのは、一人一人にひとつ、天からいただいている御霊という存在です。それはみんな違っているものの、御霊が絶対に持っているものは、良心・真心・楽しもうとする心・他を思いやる心、そして尽くして和(やわ)す心です。日本人はよく、宗教において節操がないなどと言われますが、それは「和す」というもともと御霊に持っているものがあるからであり、キリスト教であれ仏教であれ、排除することなく、その良いところを受け入れ、融合し、より良く生きることができる民族なのです。

日本人の本来性というものは何なのか。

その一つは「自分のことは後にして人を先にする」。そして、いざと言うとき、自分を忘れ、世のため人のため真を尽くし、正直で恥を嫌がり、清く美しく自然を尊ぶ、これが日本人の本来性とのこと、とても嬉しく思います。

人が生まれて死ぬまでには何をすればいいのか。生まれてきた限り、どんなことがあっても生きて生きて生き果(おお)すことです。主人はよくこういっていました。「この世は嫌なことばかり、それでもやらねばならないことばかり、どうせやるなら喜んでやろう」と。喜んでやり、生き果す、ということを念頭においていました。主人もたびたび脳梗塞を起こし、病院に覚悟を促されるようなこともありましたが、七五歳まで生き、寿命の日まで精一杯生き果すことをやったのだと思っています。人は肉体的なことや金銭的なこと

など生まれた時の状況は違います。それはその人の努力に関わりがないのに、どうしてそういうことが起こるのか、と疑問でした。学ぶなかで「前生(ぜんしよ)う)がもの申す」と知りました。肉体は一代限りですが、御霊は前生・今生・後生とずっと永遠に生き返り生まれ変わりしている、と聞かせていただき、納得できました。元を持っているものがあり、そこから日々徳を積んだり、業を深めたりしながら、御霊に何を刻んでいくのか。そして天に帰っていったとき、天は愛しかないので「次はこれでやっておいで」と御霊に必要なことがこめられてまた生まれてくるのです。だからこの世には、良いことも悪いこともない。すべては良いことに決まっているのです。

(抄録 中川千都子)





「あたりまえにありがとう」

伊勢青少年研修センター館長

講師 武田敦宏先生



■愛は 愛して 愛がわかり 愛されて 愛がわかる

小学校5年生のすすむ君はお母さんに「請求書」を出します。「ポチの散歩代一

〇〇円、弟と遊んであげた代金一〇〇円等、全部で五〇〇円。」お母さんは微笑ましいなと思いつつ

五〇〇円を払ってあげます。翌朝、今度はお母さんがすすむ君に「請求書」を出します。すすむ君がドキドキしながら

ら中を開けると、「あなたが赤ちゃんのとき飲んだおっぱいの代金、あなたが風邪をひいたときのお薬・看病代、あ

なたが生まれてこれまで一切のお世話賃等、合計みんなタダ。」すすむ君はとても大事なことを忘れていたことに気

づきます。お母さんから愛されていたことに対するありがたさの気持ちでいっぱいになりました。

### ■命の大切さを伝えていく

「いのちをいただく」という絵本のお話です。食肉加工センターに勤める坂本さんの息子しのぶくんの参観日。食肉解体の仕事をかっこ悪いと思っていたしのぶくんはお父さんの仕事を「肉屋です」と答えます。しかし、仕事の大切さについて担任の先生に諭され、お父さんの仕事の偉大さを理解していきます。

ある日、坂本さんの職場におじいさんに連れられた一頭の牛と女の子が来ます。「みいちゃん、ごめんね」謝り続けながら牛のお腹をさする女の子。生まれた時から一緒に育った牛との別れを悲しむその姿に、坂本さんは「この仕事は誰かに代わってもらおう」と思います。そんな坂本さんにしのぶくんは「心の無か人がしたら牛が苦しむけん、お父さんは優しいからお父さんがしてあげて」と頼みます。しのぶ君との約束を守り職場に出かけた坂本さんは、威嚇するみーちゃんに、「みーちゃん、ごめんな。みーちゃんが肉にならんとみんなが困るけん、許してな」と声をかけ

ます。みーちゃんは穏やかな顔になってピタツと微動だにしないくなり、涙を流しながら命を解かれます。

みいちゃんの肉を食べたくないという女の子に、おじいさんは「みーちゃんの命がお前の命に重なって、ずーっと生きていくんだよ。食べてあげろ」と言います。女の子は「おいしか」と言っていたきます。この話を通して、

好き嫌いの次元を超えて、命をいただいて自分の命がなくなっていくのだ、ということがわかっていただけたと思います。

### ■大切なものは次の世代に

私の母方の祖父、和田久治氏はノコギリの目立て職人でした。明治34年生まれ、13歳で丁稚奉公に入り15歳で親方に認められますが、溶けた鋼が全身を包む事故に会い、左目を失明し摘出する大やけどを負います。

親方から、「片目の目立て職人は聞いたことも見たこともねえが、一人ぐらいいいんじゃねえか」と言われ職人を続ける決意をしますが、「俺は教えられることは何にもねえ」と厳しい表情で言われます。その日から毎朝、片目でも遠近感が得られるように会津の山から道なき道を駆け下り修行した祖父の体には、その時の古傷がたくさん残っていました。

26歳で独立しますが、片目の職人に世間は冷たく、3か月間一人も客が来ません。ある時、地域一番の木工からいただいた仕事をきつかけに一流の腕を認められます。「目で見て学べ」が基本であった当時、50人もの弟子には3年でものにしてやると言い、技術は墓場まで持っていけないと惜しみなく弟子に伝えました。一人前と認めて暖簾分けする際には、「秘中の秘」を伝授したといいます。火鉢の引き出しからでてきたメモには「ていねいに、ていねいに」と書かれていました。

### 『どんなことが起きても 笑った分だけ』

幸せがある 泣いた分だけ これからがある

■「P.ジャヤワルダナ氏は、日本にとつての大恩人です。1957年9月4日〜8日のサンフランシスコ講和会議において、日本を四つに分けて連合国が分割統治する案が主流で

あるなか、ジャヤワルダナ氏はスリランカの代表として、日本に対する賠償請求権を放棄し、「愛によってのみ憎しみを超えられる」と訴え、他の国にも同様の対応を求めます。大会場は拍手と歓声によって震え、1955年4月28日に日本が主権を回復するきっかけとなりました。

### ■愛に包まれている

滑脳症という難病のタクヤ君には、歩けない、話せない、自分で食べれないなどの障がいがあります。5歳のとき、お母さんとの指談により次のような詩を創りました。

「幸せはこの僕のこの体の中にある

幸せは満ち足りたものの中にあるのではなく  
足りないものの中にある」

杉山明さんがタクヤ君の詩に曲を付け、「幸せの秘密」という歌になっています。

「人は見たいものを見る  
聞きたいものを聞く 思えば思われる」

修養団の沖縄キャンプに車いすで参加した17歳の洋子さんは、七夕の短冊に次のような願い事を書きました。

「お母さんより一日早く死なせて」

お母さんがいなくなったら誰がおしめを変えてくれるのかな、お風呂に誰が入れてくれるのかな。17歳の娘さんの切なる思いが伝わってきます。そして、洋子さんの短冊を見たお母さんは次のような願い事を書きました。

「贅沢なお願いだとは神様、わかっていますが、

娘より一日長生きさせてください」

(抄録 柴原啓司)



《感動語録》

◆講話 武田数宏センター長

【Aグループ】

- ① どんなことがおきても、笑った分だけ幸せがある。  
泣いた分だけこれからがある。

- ② 憎しみからは何も生まれません。

- ③ 日本人の心＝自然を感じ、自然に学び、感謝する心。

【Bグループ】

- ① 愛によって憎しみを超えられる。

- ② 先祖を敬うことは、自分を大事にする。

- ③ 娘を一日でも長生きさせてください。

【Cグループ】

- ① ご先祖様は、自分の中にある。

- ② 幸せは足りないものの中にある

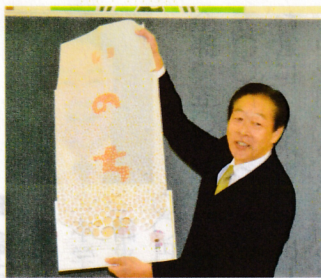
- ③ 命をいただいてつながっていく。

【Dグループ】

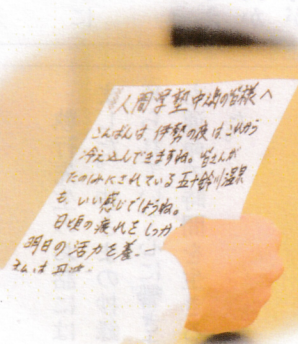
- ① 何事も「丁寧」に

- ② 命をいただいて、自分の命がつながっていく

- ③ 大切なものは次の時代へ＝伝承









# 《人間学塾・中之島》

平成2年1月カリキュラム

\*日時 1月11日(第2土曜)

午後1時〜5時

\*場所 大阪大学中之島センター(10F)

\*講師 木南一志先生

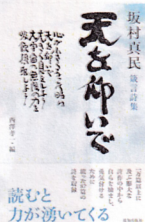
「死而後已(ししてのちやむ)」

1959年一月兵庫県生まれ。株式会社新宮運送代表取締役。『S-DEC運動』という、4000日間の無事故無違反を推進する循環型の運動を実施、「事故が起きては仕方がない」という考えを壊し、社員の自発的な努力の必要性を促している。本物と呼ばれるような企業を目指して、柔軟なスタンスで事業を推し進めている。

## 《お薦め書籍》

『坂村真民 箴言詩集 天を仰いで』

坂村真民 著  
西澤幸市 編



出版 致知出版社  
頒価 一四三〇円(税込)  
ISBN-13 978-4800912213

真民は、人間の生き方を常に自分自身に向けて問いかけ、その答えを「自分への戒めの詩」「箴言詩」として、多くの詩を残しています。真民の詩は、「自身自身に向けた詩」であり、その中心となるのが「自分への戒めの詩」なのです。真民がそれぞれの年代に、生きる苦しみとともに自らを戒め、自らを励ますために書いた詩を選び出しました。この『箴言詩集』が、今を懸命に生きる方々を励まし、明日へ向かって生きてゆくための道しるべになることを願っています。

## 《芳信抄》

鍵山秀三郎先生(東京都目黒区)

執行草舟先生の垂直的な生き方は、現代の日本人にとりましてとても大切な教訓であると思います。細川三郎様が、次の十年に向けての展望を明らかにされ、高い志に敬服致します。

山下武彦様(埼玉県児玉郡)

「運命を生きる」は、深く大きな間を私達に与えてくれています。森信三先生がよく言われた「天からの封書」に通ずるものと思いましたが、「自分がなぜこの時、この地に、この家に、両親の子として生まれ、これまでの人生を歩んできたのか」を考えてみると、運命にたどりつくヒントになるのかとも考えました。

大出雅一様(埼玉県川越市)

執行草舟先生のお話は奥が深いので、一語味わうとよく分かってきます。森信三先生の「逆境は神の恩寵的試練」や「最善観」が念頭に浮かびました。自分の身にふりかかったことは、自分に必要だから生じたものだから、避けたりしないで受け止めて対処すべし。と私なりに考えてみますと、総じて必然であつたと気づかされたことが度々ありました。

先生のお言葉に「毒を喰え」を思い出しました。老人の甘えを戒めたもので、寺田先生の「大悟徹底」も理解を助けてくださいました。

稲垣孝志様(愛知県春日井市)

運命とは垂直の宿命の中を生きること、人に褒められることなく、失敗し失望を噛みしめることが、運命にあたりすること。横は気にせず縦に生きなければ!!宿命を愛する…の言葉に、ズキンとききました。

桂 誠司様(愛媛県四国中央市)

執行先生のお話、凄いですね。「自分に与えられ

た運命を愛すること」自分は、そこまでのレベルには程遠いですね。肯定しているくらいでは、甘い。佳いお話でした。

坂部智一様(愛知県豊田市)

執行先生のお話には、大変多くを学ばせていただきました。皆さまの抄録には、更に先生のお言葉がまめられていて心に響きます。森先生の「人生二度なし」も運命の時間を生きることが根底にあることが判りました。

柴田久美子様(岡山市)

大切な紙面に『幸せになるヒント』のご案内をありがとうございます。喜びと驚きでした。

## 《大悟徹底》

先日、寺田一清名誉顧問よりみなさま方へのメッセージ

ジを揮毫くださいました。

10月中旬、安息の地に、ご息女が

お見舞いを兼ねてご訪問。

お元氣にお過ごしのこと伺い、

大変嬉しく、安堵しています。

いつもと変わらない快活な筆の運びです。

